

## 『ラジカセ好きな女の子』 - 彩暁

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

下心とかそういうのではなく、クラスに放っておけないやつがいる。それがこの子との付き合いの始まりだった。

「今日もニラレバ炒めなのか？ 最近多いな」

俺、杵島鋼紀(いりじまこうき)は今、教室でその子と一緒に昼飯を食べている。

「ニラレバがなくては生きていけない。それに、昨日と違ってほうれん草がついてる……もぐもぐ」

その子——今、ニラレバをついばんでいる子の名は白金鈴音(しろかねすずね)。身長は一四〇センチあるのかどうかってくらい小さい。一説によると身長は一三八センチらしい。とても可愛い子だが、無口で人見知りか激しいためか友達がいない。そんな彼女と一緒にいる俺は、クラスでは彼氏だ何だと言われている。が、別にそういう関係ではない。以前は周りが囂(はや)し立てるたびに交際を否定していたが、今は気にしていない。

「相変わらず鉄分が多いね」

「……鉄が美味しい」

コントレックスを一口飲む白金。ミネラルがものすごく多い『硬水』だが、俺はあまり好きではない。しかし、白金は他のミネラルウォーターや水道水より、これがうまいと主張している。

「ゴールデンウィークはどう過ごすのさ？」

俺は白金に聞いた。

「部活……かな？」

「お前、軽音部を辞めたんじゃないのか？」

「そうだった」

そもそもこいつと知り合ったきっかけは、一年の時に軽音部へ体験入部したことだった。当時の彼女は話しかけても最低限の返事しかしない、素っ気ない子だった。結局俺はそのまま入部せず、彼女とも仲を深めずに一年を過ごしたが、クラスと一緒にってから、こうやって昼飯を共にする仲となった。

「しかしどうして辞めたんだ？」

俺は再び白金に聞いた。

「……思っていたより面白くなかった」

「ほう。そもそも白金って何か楽器やってた？」

「トライアングルと……あとカスタネットなら。うんたんうんたんって叩くんでしょ？」

「普通うんたんとは言わないが叩くのは合ってる。でも軽音とあまり関係がないぞ」

カスタネットを叩く白金を想像してみる。うんたんうんたん、と無気力そうな声が脳内で反響する。本人が楽しそうかどうかは分からないが可愛らしいので見てみたい。

「ギターとか難しそうだったし、ドラムもやらせてもらったけど上手いかわなくて。それに他の人と仲良く出来なかった」

黙々とほうれん草をつまみながら白金は答えた。彼女の食べるペースはゆっくりとしている。

「そうだ、今度タマダ電機行って新しいパーツを見に行かないと」

白金ははっと思いだした。タマダ電機とは学校のすぐ近くにあるリサイクルショップだ。某大手量販店と名前は似ているが規模とか見た目とか全然違う。

「何のパーツだい？」

「パソコンだ」

「自分で作ってるのか？」

白金は首を横に振る。

「見るだけで楽しい」  
「そういうもんか。作った事はあるのか？」  
白金は再び首を横に振った。  
「見ると難しそう」  
「そうなのか。パソコン作るって面白そうだな」  
「面白そう、というかむしろおい……いや、なんでもない」  
「じゃあ放課後に一緒に行くか？」  
「一緒？ ……二人で一緒？」  
ぼんと白金の顔が一気に沸騰した。  
「あ、やっぱ恥ずかしいか？」  
白金の耳からやかんの笛の音が聞こえてきそう。思わずお互いの耳を近づけてみた。すると、代わりに鼻と口から笛のような音が鳴った——ような気がした。彼女から鼻血も出てきそう。  
「ううっ、これ以上近づくのらめ……お昼が食べられない」  
涙声で白金が言う。  
「すまん、ちょっとふざけてみたかっただけだ」  
「……っ！」  
おでこにおでこをごちんとぶつけられた。でもそんなに痛くない。  
「本当すまん。これ以上はしないから安心して昼飯食ってくれ」  
白金は再び弁当を食べ始めた。そろそろ昼休みが終わる頃だ。  
「……はっ、タマダ電機よりも大事な事があった。杵島、頼み事がある」  
「『宿題を忘れちゃった。ノートを貸してくれ』」  
白金の口真似をしようとした。が、トーンしか真似できなかった。  
「そういうばそう。ノートを貸して……じゃなくって」  
もじもじしながら白金は続けた。左手に握られている弁当が傾いていて、中身が落ちそう。  
「捜し物を手伝って欲しい。昔のラジカセ」  
「そんなもんを学校に持ってきているのか？」  
「違う。学校にはない。その……」  
もじもじとしながら白金は俯く。  
「あたしの家にある」  
「それなら俺じゃなくて、親に任せておけばいいんじゃないか？」  
「親は……」  
何も言えずに、不満そうな表情を見せる白金。  
「親には任せられないのか？」  
「そ、そうそう。だから友達の前で手伝って欲しいなって」  
言っていることが若干不自然だ。だが、俺には断る理由なんてなかった。  
「分かった、一緒に探そうか」  
「やった。ありがとう。はっ……そろそろ昼休みが終わる。早く弁当を食べないと」  
中身が落ちそうな弁当を机に置き、白金は食べるペースをさらに上げた。喉に詰まらせるなよ、と思いながら俺は彼女を見守った。

そんなわけで白金家にお邪魔する事になった。見るからにして二階建ての普通の一軒家だ。

「この辺って結構静かだな」  
「家の周りは落ちつけるんだ」  
住宅地の中にある一軒家だ。何の変哲もない。白金が玄関の扉を開ける。  
「ただいまー」  
無気力そうな声が玄関とその先の廊下へと伝わる。廊下から何かしらの声が聞こえた。  
「お母さんがいる。他は今のところ誰もいないから」

「お前の家って兄妹とかいるのか？」  
「お父さんとお母さんとあたしで三人暮らし」  
白金は首を横に振って答えた。  
「一人っ子なのか？」  
「そうなる。上がるか」  
白金につれられる形で俺たちは玄関へと上がっていった。二人でリビングに向かったら、そこでは肩まであるウェーブがかかった茶髪の中年女性がテレビを観ていた。  
「お母さんだ」  
白金が紹介するも、母親とされる女性は二人の存在に気づいていなかった。  
「気付いてないみたいだぞ」  
「むむ……」  
白金は母親の肩をちょんちょんと突いた。  
「はっ、あら？」  
娘に気付いた母親はさっとテレビの音量を下げた。  
「鈴音お帰り。一緒にいるのは……ボーイフレンド？」  
「はうっ」  
母親の一言で白金は顔を赤くしてしまった。  
「いえ、違いますよ。自分はただの友達です。ちょっとお邪魔しています」  
「そう、友達っ、友達の杵島だ」  
焦りながら俺を紹介してくれた。  
「杵島君かあ。どうもよろしくね。今からお茶を入れてくるから」  
白金母は台所へと引っ込んでいった。  
「じゃ、あたしは着替えてくるからここでゆっくりしてて。そこに座っていいよ」  
ソファを指して白金は出て行った。立ったままもアレなのでソファに腰掛けることにした。散らかっている様子のない綺麗なリビングだ。だが、窓際には割れた基板やスピーカー等の何らかの部品が無造作に置かれていた。  
「お茶が入ったわよー」  
お盆を手にして白金母が再び現れた。  
「ありがとうございます」  
「お菓子もあるから良かったら食べてね」  
お茶とともにどら焼きを差し出した白金母は、隣の椅子に座った。  
「杵島君って鈴音と同じクラス？」  
白金母が聞いてきた。  
「はい、そうです」  
「それがきっかけで友達になったの？」  
「そうなりますね」  
「最初は結構つんつんしてたでしょ？」  
と白金母は言った。言われてみると確かにそうだ。白金に今年初めて話しかけた時も態度が素っ気なかった。これだから友達がいなかったのだろうか。  
「あの子、別に他人を嫌ったりしないし、むしろ友達が欲しがってるの。でもちょっと特別な子というのもあるから、距離を置きたがってもいるんだわ」  
「そうなんですか。特別な子というのは？」  
「大したことじゃないわ。あの子から直接聞けると思うから。でも杵島君なら、直(じき)にわかるかもしれないなあ」  
直に分かるとはどういう事なんだ、と白金母に聞こうとしたとき――  
「杵島、お待たせ」  
階段を下りる音がしたかと思ったら、私服姿の白金が登場した。デニムのオーバーオールに白の長そでTシャツと、背丈の小さい白金にはぴったりの服装だった。  
「一緒に下に降りよう」  
「この家には地下があるのか？ 結構広いんだな」  
「うん、地下の倉庫を探してほしい」  
お茶を飲み干したあと、俺は白金に倉庫へと連れられていった。階段の下にある扉

を開くと、地下へと続く新しい階段が現れてきた。それを下った所に倉庫があった。「ここが白金家の倉庫なのか？ あの家からは想像がつかないくらいの広さだけだ」

うちの教室並みの広さには木製の棚が数本と段ボールの山があった。段ボールや棚からは電化製品の部品らしき基盤やコードがちらちらと見えていた。リビングと同様、こちらも割ときれいに片付いている。

「ここを片づけるには相当気合い要りそうだな」

俺は素直な感想を口にした。

「うん、結構大変。杵島は棚を探して」

そう言われて、俺は頑丈そうな木の棚を調べ始めた。内部の表面はぼこぼこで、木が随分と変色しているところから、かなりの年代物だと思う。埃がないところからすると、ここもつい最近整理されたみたいだ。ゲーム機、CDプレイヤー、ノートパソコン等、様々な機械が新旧混ざって収められている。

「これはもしかして……」

様々な機械に目を通していく中、ラジカセらしきものを見つけた。

「もしかしてこれじゃないよな？」

俺はラジカセを引っ張り出して、白金に見せた。白金は首を横に振った。

「探してるラジカセはもっと大きい。スピーカーの部分が大きくなって銀メッキになってる」

そう言って、白金は段ボールの中から年代物のラジオを取り出した。

「これに結構似てる。探しているものはカセットテープも再生できる」

白金が手にしているラジオは、銀色の角ばったフォルムに大きなスピーカーがついていた。そんなに特徴的なものではなさそうだ。

「言いたい事はなんとなく分かった。でもなんでラジカセを探してるんだ？」

「お父さんからの誕生日プレゼント。五歳の時にもらった」

「ふむ、ラジカセが好きなのか？」

女の子へのプレゼントがラジカセというのは変わっていると思う。

「うん。でも初めて貰った機械だから大事にしてた。それが最近欲しくなって探してる」

思い入れのあるものなんだな。俺はそう考えて、ラジカセ探しを再開した。

ここの倉庫は綺麗(きれい)に整理されている、と思ったら割とごちゃごちゃになっている棚が多かった。本を本棚にしまうのは得意だけど綺麗にならべるのが苦手、そういうタイプの人が整理したんだろうな。

「もう全部探したが見つからないぜ」

ラジカセなんてそんな小さな代物じゃないだろうと思ってあらゆる機械を調べたが、意外に時間がかかってしまった。棚の中がごちゃごちゃしている事に加え、それだけ調べた棚の数が多かったのもある。

「うう……」

白金も段ボールを調べつくしたようだった。この様子だと見つけれなかったみたいだ。

「なあ白金。他に心当たりのある場所ってないか？」

「よく分からない。あるとしたら……あたしの部屋とか」

白金の最後の台詞だけボリュームが下がった。

「白金の部屋か……」

俺が入るのはちょっと気がひける。というか今まで女の子の部屋に入った事が全然ない。

「あの、杵島にも手伝って欲しい。あたしの部屋に入って欲し……はうっ」

「ああ、分かった。さっと探すか」

白金もこっちも緊張していた。彼女に案内されて、地下から二階へと上がっていく。『すずね』と可愛い文字が貼られている扉の中に入っていった。女の子らしく、寝具や蛍光灯の傘等のインテリアは水色を基調としており、ぬいぐるみもいくつ

か置かれていた。しかし、リビングと同じく、ここにも機械の基板やネジ等の部品が勉強机に散らばっていた。割れてしまった基板や、曲がってしまった機械の外装なんかもあった。

「工作が好きなのか？」

「……！ あ、うんっ。まあそんなところ。あまり得意じゃないけど」

それにしても基板を派手に壊している。白金ってそこまで不器用だったっけ？

「それじゃ、机島は高いところを探してくれる？ あたしだと手が届かないところが結構ある」

と白金は言って机周辺を探し始めた。確かに白金にとって手の届かないところはいっぱいありそうだが、俺にとっても高すぎる部分がいくつかあった。例えば、部屋の入り口からすぐ左にあるクローゼット上部に扉がある。俺なら背伸びしてなんとか扉を開けられるが、中を探すのはきつい。

「分かった。白金、何か踏み台とかないかな？ 俺でも届きそうにない所があるんだ」

「踏み台になるもの……」

白金は部屋全体をきょろきょろと見回した。そしてベッドの下にある、銀色でとても堅牢そうな箱を発見し、俺の前に引っ張り出した。黒い取っ手つきのその箱は、白金を中に入れて持ち運べそうなくらい大きい。

「これを使っていい」

「ありがとう」

早速俺は箱を踏み台にして、クローゼット上部を探した。中にはブラウン管テレビやらミニコンポやらが埃(ほこり)を被って眠っている。見た目からしてあまり使われていないようだ。コンセントを挿しても動くだろうか。

舞い上がる埃で咳き込みながら機械を下に降ろすと、奥からダンボールが現れた。それも降ろして、中身を調べると、アルバムが三冊入っていた。

「これは……」

無意識に俺はアルバムを手取る。

「ダメーっ！」

すると、瞬く間もなく白金がアルバムを奪い取った。

「見ちゃダメ！ 見たら死ぬ、呪い殺される！」

顔を赤らめ、アルバムを必死に抱きしめながら白金は早口でまくし立てる。

「ああ、分かった。見ようとしてすまん」

突然の白金の行動に驚きながら、俺は謝った。彼女は涙目でアルバムを抱えたまま動かない。

そんなに恥ずかしい思い出があるのだろうか。そういえば、昔の白金ってどんな感じなんだろう。今よりは小さいはずだからもしかして、竹の中にいるかぐや姫くらいの大きさだったりして――

「なんか失礼な事考えてた？」

膨れっ面で白金が俺を見つめた。さっき考えてたことは黙っておこう。

「いや、考えてない。それよりラジカセ探しを再開しようか」

釈然としないまま、白金はアルバムをベッドの下にしまい、机周辺の探索を再開した。俺も銀色の箱に乗って、クローゼット上部を覗いた。

「これは……」

ダンボールがあったところの奥に、銀色の四角い機械を発見した。年代物の銀色のラジカセだ。

「白金、もしかしてこれか？」

埃を払い、そのラジカセを白金に見せた。

「これ、これだ！ ありがとう」

白金はラジカセを手にして、ひしっと抱きしめた。改めてラジカセを見ると、とても不細工に見える。白金の親父はこんなものをクリスマスプレゼントにしたのか。それでも白金にとっては思い出深いものなんだろうな。

「……結構すぐ見つかった、ね？」

しどろもどろになりながら、白金がつぶやいた。

「だな。良かったな」

それからの会話が續かない。何を話せばいいんだろう。えっと——そうだ、リビングにでも行くか。

「あの、杵島……一緒に散歩しない？」

俺が提案をする前に、緊張した面持ちで白金が言った。早く居心地の悪い空気を変えたい俺には断る理由がなかった。

ラジカセを持った白金と一緒に、俺はすぐ近くの廃材置き場に連れられた。彼女は振り返ろうとせず、会話もしなかった。今の彼女はいつもと違う。ラジカセを持って散歩なんて普通はしないはずだ。一緒に仲良く散歩とかそういう雰囲気ではなかった。

住宅街の真ん中にある空間には様々な機械や廃材が混ざっていた。両隣にある住宅と空間の広さからして、ここもかつて家があったんだろうか。ベニヤ板やら木材と一緒に、冷蔵庫、パソコン、テレビ、ありとあらゆる電化製品が無造作に積みあがって、一つの山を形成している。

廃材置き場に入ると、白金はがらくた山の裏側へと回った。そして彼女はラジカセを地面に置き、ふもとで横たわっている冷蔵庫に腰掛けた。一緒に座ろう、と言わんばかりに彼女は俺を見つめる。一人にしないで、と訴えかけているようにも見えた。そんな彼女を放っておけない。俺は彼女に優しく微笑みかけながら頷き、隣に座った。

沈みかけの太陽ががらくた山の大きな影を映す。大きな影が俺達二人を呑み込んでいく。柔らかく冷たい感触が俺の右手に伝わった。

「杵島……その、あたし……」

俺の右手には白金の左手が添えられていた。彼女は俺の顔を見上げられずにただ震えていた。

続きの台詞をなかなか言い出せない白金。何を伝えたいかは分かった気がした。だからこっちも緊張する。気持ちを抑え、平静を装う。

「……………っ〜！」

耐えきれなくなって白金は強く目を瞑ってしまった。

「分かった、白金」

「……っ！」

「分かったよ」

俺は彼女の小さな手を握り、小さな身体をそっと抱きしめた。

「いりじま……」

がらくた山が創る不気味な闇が優しい影に感じた。静かな、二人だけの空間が気持ちいい。彼女から伝わる優しい温もりを受け取る。

「杵島。あたし……ずっと前から好き」

緊張感がほどけた様子で、白金が伝えた。

「軽音部に入部した時は気が合いそうだなって思ってた。けど、周りに友達がいないくて、ずっと一人だった……昼ごはんの時とか。だけど二年生になって、杵島はあたしに優しくしてくれた。体験入部でしか会っていないのにいつもお昼は一緒だったし、時々一緒に帰ったりした」

まあ一緒に昼を食べるのはなんかこいつが放っとけないからだ。帰るときもそうだ……でも『放っとけない』ってどういうことだ。

「そして今日も一緒にラジカセを探してくれた。こんなぼろいラジカセのために」

優しい声が段々と涙声に変わっていく。

「だから……こんなあたしを大切にしてくれて……すごく嬉しい。一緒にご飯食べる」とほっとするし、一緒に喋ると楽しいし——」

白金は一生懸命続きを話す。彼女の頭を押し付けている俺の胸が濡れていく。

「だから……あたし、杵島のことが好き」

伝えたい事を繰り返した白金は俺を強く抱きしめ、そして涙を流した。

俺はどうすればいいか。白金のことは正直『妹』のような存在だ。昼休みの時も、俺が誘う前は一人で食べていた。軽音部の体験入部の時も、彼女はどこか独特な空気を出していた。その時から一人が多いと聞いていたし、この子は平気なのかと思った。

などと考えているうちに彼女の涙は止まっていた。俺の手は無意識に彼女の頭から背中までを撫でている。その一方で、俺の中では分からない感情が込みあがっていた。

白金はやっぱり『妹』なんだろう。俺は彼女のために、理由を問わずにラジカセを探した。好きでなかったら、こうやって彼女の答えを待たずに抱きしめる事なんてできるか。

「白金……俺はな」

ピクリと反応する動きが彼女から俺へと伝わる。この気持ちに対しどうすればいいのか。

「正直言って、今の気持ちはまだはっきりと分からないんだ」

「っ！」

「白金の事はただの友達じゃない。それは自信を持って言える。だけど、本当に白金の事が好きかどうかというのはよく分からない」

「……………」

残念がっているのか、白金の頭が下に傾いた。同時に彼女の腕から力が弱まる。

「だから、俺は白金の事がもっと知りたい。お前さ、普段はあまり喋らないから、よく分からない所とか沢山あると思うんだ」

すると彼女は俺の顔を見上げてきた。

「毎日一緒に昼飯食べるのもそうだけど、これからも一緒に帰ろうぜ。あと……そうだな、いつかは街へ遊びにいくとかいいかもね」

「……っ！」

何かを言おうと彼女は口を開きかけたが、何も言わずに笑顔で頭を胸の中にくずめた。

「な、だから明日も一緒にいようぜ」

白金はすぐ頭をあげ、ぶるぶると横に振った。

「ありがとう……すごく嬉しい。けど、あたしが言いたいのはそれよりも大事な事で……」

「ああ、何だい？」

「ちょっと腕を離して」

腕を解くと、彼女は地面に置いたラジカセを拾い上げた。

「みんなには内緒」

「それってお前の親も含めてか？」

「親は分かっているから大丈夫。そのラジカセの事なんだけど……」

白金はラジカセの底に付いた土を払い、自身の膝の上に置いた。

「ちゃんと動くのかこれ？」

「壊れててもうダメ」

「じゃあなんで大事なんだ？」

と聞いたその瞬間。

彼女がいきなり外装を剥がすではないか。剥がした外装をどうするかというと、彼女はそれを自身の口に近付けた。小さな口を目いっぱい開けながら。まさかこれから食べようとするんじゃないよな。

「ちょっと待て、一体何をする気なんだ？」

俺は慌てて彼女の右手を掴んだ。

「いいからちょっと放して」

白金にしては強い腕の力で、握られている俺の手を引き離す。そして右手にあるラジカセの破片を改めて口に入れ、バリバリと噛み砕いてしまった。

今、起こっている現象を俺は理解出来なかった。いや、理解したくはなかった。だ

ってこんなちいさな女の子がラジカセを食べてるんだぜ。こんな事があってたまるか。ってか俺はてっきりあいつが告白すると思って、自分から気持ちを整理してたのに……どうしてこうなった。

「……これってラジカセだよな？」

至極当たり前の事を問いかける。

「らりかへらよ」

至極当たり前の答えが返ってきた。

「ラジカセの形をしたお菓子……じゃないよな」

「おかひひやらい……ぱりぱり」

金属の屑となった破片を噛み砕きながら白金が答える。細かくなった破片は白金の喉の奥へと呑み込まれていった。

「あたし……金属が好きなんだ。特にレアメタルとか極上の味がする。このラジカセはすごいんだ。金属じゃないけど、数世代前のシリコンを使ってて、これがとてもコクがあってマイルドでビンテージなんだ」

口の中で基板をもぐもぐさせながら白金はうっとりとして語る。

「それで……これ、中に変わった金属が入ってる。インジウムとか、プラチナとか、他にもいっぱい。お父さんが色んな機械のパーツを寄せ集めて作ったものだからそういう金属が入っている。ほら」

細い腕がラジカセを真つ二つにして、中身を見せる。「ほら」と言われてもどうなのかよく分からない。

「金属の味なんて全然分からないが、それがお前の内緒の事か？」

白金は頷く。

「それで、食べるためのラジカセを探すのにどうして俺にお願いしたんだ？」

二つに裂けた残骸を見詰めつつ、白金は言った。

「このラジカセ、お父さんからあたしへの初めての誕生日プレゼントなんだ」

「だったらなんでそんな思い出深いものを食べるんだ？」

「金属を食べているのはただ美味しいって事だけじゃない。食べるとね、その金属を手にした人とか、思いとか、色々分かるの。このラジカセもそう。お父さんが工房で一生懸命組み立てる所とか、誕生日の思い出とか、これでラジオを聞いてた事とか」

嬉しそうに、ゆっくりと語る白金。

「あたしが金属を食べ始めたのは、中一のところからなんだ。それより前にも、校庭の鉄棒を舐めたり齧ったりしたことはあるんだけど。その時の鉄の味と、頭が宙ぶらりんってする気分がたまらなかったの。だからこっそり、机の脚をがりっと齧った。一度齧(かじ)ったら夢中になっちゃって、気づいたら穴が空いてしまった」

さっきまで嬉しそうに語っていた白金の表情が曇っていく。

「で、しばらく繰り返しているうちに、先生にみつかっちゃった。すぐ病院に連れてかれて、薬を飲んだり、食べたものを吐かされたり、検査とか受けた。すぐに退院したけど。親にも怒られて、心配された。机を食べるなんてあり得ないって。

じゃあ机じゃなければいいかと思って、今度はスチール缶を食べてみた。誰にも見られないようにこっそりとね。食べる金属も種類が段々と増えてきて、アルミ缶やら、銅の鍋やら、電池も色々食べた。それで、冬くらいに教室でガジガジってアルカリ電池を二十本くらい食べていたんだけど、それをクラスメイトに見られちゃった。あの時も大変だった。保健の先生を呼ばれたかと思ったらまた救急車で運ばれちゃって……手術までされた。どこもおかしくなかったのに。

むしろ入院している間が大変だった。金属が足りない、金属が足りないって唸るようになってさ。夜も寝られなかったり、起き上がるのにも苦労した。最初は電池を食べて中毒を起こしたからかと色んな手術を受けたけど、一向に良くならなくてしばらくは大変だった。だから看護師とか他の患者の目を盗んで金属を探し求め、そして食べた。空き缶のゴミ箱ごとトイレに運んだこともしょっちゅうあった」

白金は段々と顔を俯かせた。がらくたの影で彼女の表情が見えにくい。

「そうやって金属分を補給して、一か月で何とか退院できたんだ。で、学校に戻ったらいじめが待っていた。よく女子トイレで張り倒されて、タイルを舐めさせられた。

先生がいない間に、口にちりとりを啜えさせられたり、画びょうを流し込まれたこともあった。金属なのにとっても不味かったのは覚えている。周りのみんなの汚い心が伝わったからかな……」

声が小さくなり、喋るペースが落ちてきた。これ以上は放っておけない気がした。

「辛かったら無理しなくてもいいからな」

「大丈夫……それで中学校の間はずっといじめられてたんだ。ひどくってひどくって学校に行けなくなった。だから行かないようになった。心配した親はあたしのために、街を引っ越したんだ。その頃にはなんか私の体質の事を理解してくれてた。引っ越してからはご飯の鉄分が多めになったんだ。代わりに、外では金属を食べちゃダメって言われた。だから我慢したんだ。けど、最近抑えきれなくなっちゃって……」

たまにここでがらくたを食べるようになったんだ。学校の帰りに、親に内緒で。あと、軽音部に入ろうとしたのも金属が手に入りそうだから。結局部活が面白くなかったから辞めちゃったけど」

顔をあげる白金。瞳には涙が溜まっている。

「それで……。杵島……こんなあたしでも一緒にいられる？このままあたし自身の事を隠すのが苦しい。だから……今日ラジカセ探しをお願いした。……っ、金属を食べないと生きていけない身体になっちゃったあたしなんて嫌でしょ？」

まったく、さっき告白したのはどこのどいつなんだ？ って告白させたのは俺か。

「そんな事言うなよ」

「？」

「確かに驚いたよ。普通、人間は金属なんて食べないからな。別に俺は何とも思っちゃいない……いや、お前の事を一つ知ることができた。だから嬉しいんだ」

「っ！」

俺は白金をそっと抱きしめた。とても小さな温もりだが、俺にとっては大きな支えだった。昼の何気ない発言や行動、今日こうやって白金の家に行ってきた事。放っておけないんじゃないじゃなくて、俺は彼女が気になってた。やっぱり白金は『妹』以上の存在だ。

「俺、白金の事が好きだ」

俺は彼女の唇にキスをした。彼女の頬は真っ赤に染まったが、いつぞやのように沸騰せず、穏やかにキスを受け入れた。

彼女の唇の味は、甘くて、どこか懐かしいものだった。お世辞にも格好良いとは言えないラジカセを作る白金父。プレゼントをもらって喜ぶ白金。嬉しそうにラジオを聴く白金。大切ながらくたにこもった光景が脳内を幽(かす)かに過(よ)ぎる。

金属が美味しく感じるのが分かる気がした。

こうして俺と白金鈴音は自他共に認めるカップルとなった。付きあってるんじゃない、と相変わらずクラスメートが言うので堂々とカミングアウトした結果、やっぱりなという言葉が返ってきた。今、こうやって白金と昼食を共にしても噂話をする人はいない。

「今日もニラレバ炒めなんだな……それと小魚の唐揚げもあるか。鉄分に加えてカルシウム也多めなんだな」

俺は白金の弁当を覗いた。ちなみに俺の弁当は目玉焼きサンドイッチだ。いつも弁当を作ってくれてる母はハムとレタスも入れるつもりだったが、どうやら忘れてらしくこんな貧相なサンドイッチになってしまった。おまけに何のソースもかかっていない。

「ニラレバ炒めを分けたげる」

「ありがとう、とても嬉しい」

白金は箸で炒めものをつまみあげ、俺の口に向けた。

「はい、あーん」

表情を変えずに、彼女はニラレバ炒めを食べるよう催促する。何が起きようとしていのかを周りは察知したようで、クラスの空気が変わった。しかし、箸を向けてい

る本人はそれに気付いていない。かなり恥ずかしいけどやってみるか。

俺は白金の箸の先に食らいついた。レバーの独特な味と、絡みついたオイスターソースの旨味が口の中に広がる。

「おいひいよ、ありがとう」

グーサインを出しながら俺は白金に感謝した。ニラレバ炒めを恵んだ本人はとても幸せそうだ。周りの歓声が聞こえない位に。

「でもみんながいる教室でいきなりこれってなかなか大胆だね」

「……っ！」

何気ない俺からの指摘で、白金はやっと周囲の状況を把握した。オーバーヒートしているかのように赤面になり、鼻と口からやかんの笛みたいな音が鳴った。

「これでお湯が沸かせられるな。お茶とかできそうだ」

「できないもん！」

恥ずかしがりながら白金がつっこむ。クラス内は笑い声でいっぱいになった。

「それでさ、ゴールデンウィークだけど駅前のがらくた市に行かないか？」

周囲の笑いが収まった頃に俺はそう提案した。クラスメート達は俺達を気にせず、思い思いに昼休みを満喫している。みんなカップルの邪魔をしないように心がけているみたいだ。

「がらくた市……行きたい！」

がらくた市という言葉に白金は食い付いた。

「ということは、デート……になるのか」

唐揚げを食べながら彼女は聞いてきた。

「そんな大それたものじゃないけどな。機械も色々市場で売ってるぞ」

「それは楽しそうだ。廃材置き場とは違う、新鮮ながらくたも良さそう。ちょっとお洒落するの考えるか」

ぼつりと白金がつぶやく。その言葉で、週末の『デート』がますます楽しみになる俺だった。

[戻る](#)